HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ

タイトル	高楠順次郎博士の古社寺調査 財団法人「啓明会」の 補助による高山寺経蔵の調査
著者	徳永,良次; TOKUNAGA, Yoshitsugu
引用	北海学園大学人文論集(77): 72(一)-53(二〇)
発行日	2024-08-31

高楠順次郎博士の古社寺調査

財団法人「啓明会」の補助による高山寺経蔵の調査

はじめに

本稿は、京都高山寺の収蔵庫に保管されていた、高楠 下部脩大蔵経』の校合本としての高山寺本の役割、また、 正新脩大蔵経』の校合本としての高山寺本の役割、また、 正新脩大蔵経』の校合本としての高山寺本の役割、また、 正新脩大蔵経』の校合本としての高山寺本の役割、また、 正新脩大蔵経』の概要、3、「啓明会事業報告書」から とする。しかし、高楠順次郎博士の事績のすべて、さら には『大正新脩大蔵経』の編纂事業の実態をすべて解明 することは不可能である。そこで、当面、1、高楠順次 することは不可能である。そこで、当面、1、高楠順次 がある高楠順次郎博士の古社寺図書の調査、4、高山寺に みる高楠順次郎博士の古社寺図書の調査、4、高山寺に

現存する「法皷臺聖教目録」と具体的な調査の痕跡、の

徳

永

良

次

4点について検討していく。

『大正新脩大蔵経』の関わり高楠順次郎博士の古社寺調査と

うである。その驚異的な刊行ペースもあってか、校訂に 大蔵経類をしのぐ偉業であり、その後の仏教研究には欠 大蔵経類をしのぐ偉業であり、その後の仏教研究には欠 大蔵経類をしのぐ偉業であり、その後の仏教研究には欠 大蔵経類をしのぐ偉業であり、その後の仏教研究には欠 大蔵経類をしのぐ偉業であり、その後の仏教研究には欠

刹諸 刊行がつづけられるなど、現代であっても極めて驚異的 昭 7 される日本の古写本・ は 態は未だに未解明と言って良い状態である。 したとされるが、一致しない部分も多いとされ、 上寺等の大蔵経、正倉院の天平古写経、「その他 なペースであると言える。 和 いるとは言い Ш くつもの 九年に全百巻が出版され、その間ほぼ毎月のように .に珍蔵される未刊の仏書を収蔵し」、校合に注 間 難い。 題点が指摘されており、 刊本につい 刊行が開始されてから約十年余、 高麗版の大蔵経を底本に、 ても追 校合に用いたと 跡調査が完了し わが国名 その 増 実 力

Ш

大正 仁和 次 されてい 夏・冬の休暇をもって、 二年から凡そ十ヵ年、 のような記述がある この中で、古社寺所蔵の経典の調査につい 寺 七年の設立であるので、 順 次郎 るが、 石山寺等所蔵の古書の調査に従事された。」 博 後述するように、 士による古社寺調査の実態については 啓明会の後援を得て、 東寺、 右の記述とは一 大通寺、 財団法人 青蓮 「啓明 致しない ては、「大正 毎年、春 高山 ٢ 寺 は

> まではまた書庫の調査である。六時に宿房に帰られると 時間昼食のために宿房に帰るだけで、午後一 に起床し、六時には調査のため書庫に入られた。 長谷部隆諦、 たのである。 こうした五十日が続 過ぎまで「仏教全書」の校正または執筆にあてられる。 入浴や食事があり、これが終ると、 同様で、六時から十二時まで一分の休みもなかった。 れた)それに費やされたが、 れて凡そ十年 田竜城、 「先生が古刹の山坊に赴い 塚原順英などがそれである。 蓮沢成淳、干潟竜祥、 橋本進吉、 歳月を毎 くのであ 大屋徳城、 夏 (時にはな て聖教の る 注 。 いつも二三の助手 近藤隆晃、 午後八時から十一 戸部隆吉、 春や冬の 調 (中略) 査に 時 取 休 中 逸見梅栄 毎朝 から六時 が同行し Ė ŋ 野義照 助手も か 利 Ŧ. 用さ か 時

規模、 た記 そ十年」の長期 かになっていない。 と目録作製を実施したことは、 『大正新脩大蔵経』 述からも 成果としての目録やその痕跡については未だ明 疑いようもないことであるが、 間にわたって近畿地 筆者が調査に従事している京都栂尾 の編纂事業と高楠順 これらの後輩たちの 方の寺院経蔵 次郎博 その実態や 0 残 調

あった。 順次郎博士が調査された」程度のことが知られるのみで順次郎博士が調査された」程度のことが知られるのみで高山寺については、「傳承によると、大正の末頃に、高楠

三 啓明会について

次郎博士による活動内容を見ていくこととする。啓明会と略称する)の発行した事業報告書から、高楠順が、その有力な資金源となった「財団法人啓明会」(以下、このように実態が不明確な古社寺図書の調査であるこのように実態が不明確な古社寺図書の調査である

特に本稿に関わる部分について概略を示していく。いる。以下、これを参考・引用しつつ啓明会について、いる。以下、これを参考・引用しつつ啓明会についてまとめて与したとされる、赤星鉄馬と赤星家についてまとめてができない。与那原恵は、啓明会とその設立に大きく関ができない。与那原恵は、啓明会とその活動記録や成果はど啓明会とはどのような組織でその活動記録や成果はど

第一 り、 家は と推定しているが、そのことを示す資料は残っていない。 牧野伸顕、 活動方針が掲載されることが知られるのみである。 明らかにするという意味のほか、 員は新渡戸稲造ほか十五名(理事含む)、ほか委員一名と わらず、研究事業の決定に一切関与しない方針を貫いた」 いう本格的な組織体制であった。莫大な寄付をした赤星 (同127頁) という。「『啓明』は、 役員には、 赤星家への謝意をこめた命名である」(同128頁 回の事業報告書の末尾に「附録」として、 重要部分を掲げる。 「財団の設立者にならないばかりか、 理事として、 啓明会第一回事業報告書によれば、 理事長平山 明けの明星の意味もあ 成信 知識を広め、 ほ 役員にもくわ か六名、 啓明会の 顧問に 評 以

第一章 総 則

一條 男爵牧野伸顕平山成信ハ赤星鉄馬ノ寄附ニ係

第

二條 本財団法人ハ啓明会ト称ス

第一

百

万円

(現在の貨幣価値で約二十億円)

を寄付して、大

啓明会は、

実業家の赤星鉄馬

(明治十六年生まれ

が

ル

金壹百萬圓

ラ以

テ財

団

法人ヲ設立

正

七年に設立された。

(与那原126頁)」

第三條 本会ハ公益ニ資スル為メ左ノ事業ヲ行フヲ以

という。

テ目的トス

発見ヲ奨励スルコト 特殊ノ研究、調査、著作ヲ助成シ及発明

(以下、省略)

の後の研究の礎となったものが多数ある。」(同126頁)は基礎的な文献や史資料の収集、編纂に力をそそぎ、そ医学・芸術など先駆的な研究を助成しつづけ」、「とりわ医外学系と多岐にわたり、文学・法学・理学・工学・自然科学系と多岐にわたり、文学・法学・理学・工学・この事業目的に沿って、啓明会は「人文系・社会系・

及んだ組織は解散したという。
を縮小しながら活動を続けていたが、平成二十二年間になって資産三百万円を東京大学に寄贈して九十二年間にを縮小しながら活動を続けていたが、平成二十二年にを縮小しながら活動を続けていたが、平成二十二年に

四 事業報告書の翻刻と概要説明

関わる活動内容が啓明会事業報告書から知られるのは 以下に掲げる第十四回までであるので、これらについ 第二十回 を所蔵している図書館が極端に少なく、国立国会図 までは発行していたのであろう。ただし、これらの くこととする。 しているかについて紹介しつつ、ポイントを整理して 高楠順次郎博士の古社寺調査に関して、どのように報告 のデータベースにデジタル資料があるのは、 第二十五回までは発行されているようである。 .の発行は昭和十九年であるので、まさに戦争のただ中 さて、 啓明会の事業報告書は、 (昭和十四年)までである。高楠順次郎博士に 回から少なくとも 第 口 くて、 から

また、漢字は原則として通行の字体に改める。れている部分については、必要に応じて省略していく。査の実態に関わる部分のみとし、毎回同じ内容が掲載さ高楠順次郎やそのグループに関する情報および古社寺調以下、引用にあたっては、「啓明会事業報告書」ごとに、以下、引用にあたっては、「啓明会事業報告書」ごとに、

大正七 八年度 第 回 事業報告書

_財國 財團 格明 ·會第壹回大正七 事業報告

古社 寺所蔵図 書 調 杳

届

Ξ. 住 ケ 所省略 年間ニ金五千圓 文学博士 ノ補 高 肋 楠 順 次 郎

明史上其他一 モノハ之ヲ年代順 ヲ作製セラレシ事業ヲ更ニ継続完成セントスル 高野奈良京都等ノ古社寺所蔵ノ図書ニ付 古社寺所蔵図書ノ調査ハ東京帝大文学部教授高楠 記シテ、 ノ申込ニシテ、同氏ガ数年來春夏冬ノ休業ヲ利用シテ、 上記古社寺所蔵 五名ノ補佐員ト 其 般 ノ目録ヲ作製シ、 的 _ 二、 共二今後満五ヶ年間 重要ナリト認ムル事 ノ図書ヲ一々閲読シテ、 然ラサ ルモノモー 又仏学上、 定ノ 項 休業日ヲ利 調査ヲ遂ケ目録 梵語学上、 Ì١ 之カ抜萃ヲ 順 年代明ナル 序ニ之ヲ T 順 次郎 用シ 文

11

供

スル筈ナリ。

ح

0

事

告書の

からは下

記

. の

点を指

摘

宝庫 学芸術其他ニ 多クハ単ニ其ノ書庫ニ死蔵スルノミニシテ、 ヲ明ニス 調整出 持腐卜 僧侶スラモ カサル 一ヲ活用 般 一寺院ニ ノ之ヲ利 ルヲ目 ナナリ 来次第之ヲ帝大図 ノミ ス ル ツゝアリ。 其何書ヲ蔵スルヤヲ知ラサ ナラス保存ノ方法モ完カラス、 於ケル屈強ノ資料ニ乏シカラス。 於テ然リトシ、 的ト 崩) 鍵 スル -スル タルモノト云フへシ。 ノ途ナ 高楠 之カ目録ヲ作製シ其 書館 我國、 博士等 丰 ハ 寄贈シ以 勿論ナリ。 歴史ハ勿論宗教、 ノ本事業 ĺ シテー 而シ 有様故、 八内容 其 ハ實ニ 為 即 · テ 同 然レ 般 メニ内 (ノ整理! チ所謂宝 大要 1 利 目 此 文 録 世

1 啓明 載され していた。 都等ノ古 会の 業報 7 社 補 この段階では具体的 等」 助による調査以前にすでに な 13)記述, 0 調 査を 開始 てお な古社寺の名称 ŋ 「高野奈良京 目 録 を作 は

為スト共ニ、

其ノ巻

頭

ノ部分又ハ重要ナル部分ヲ写真ニ

古来 補 ラント

珍書 ル ・スル

ラ蔵 1 Ŧ

モ

ノモ少カラス、

殊二奈良京都高

助

ス

コ

7

本邦ニ於テハ多数

ノ古社寺アリ 、テ金工

2

ノニシテ、 セリ。 スル

本会ハ其経費トシ

 \mathcal{H}

羊円

その 自的 重要なものについ は、 古社寺が所蔵 ては、 して 巻頭 11 る蔵書の あ る 13 É は重要部 録 を作

五

般ノ之ヲ利用スル」ことができるとする。 分を写真撮影するという。これによって、「世間一

氏名は記されていない。
高楠順次郎博士以外に五名の補佐員とあるが、その

壹萬四千円一○、校本万葉集ノ整理及刊行、佐々木信綱、三ヶ年一○、校本万葉集ノ整理及刊行、佐々木信綱、三ヶ年五手四百円六、仮名調査事業、大矢透、三ヶ年五千四百円六、仮名調査事業が採択されている。

^{法人}啓明會第貳回^{九年度}事業報告書 **大正九年度 第二回事業報告書**

五ヶ年間ニ金五千圓ノ補助一、古社寺所蔵図書ノ調査

(住所省略) 文学博士 高 楠 順 次 郎

為ラル。明治二十年西本願寺普通教校ヲ卒業シ、二十一 ニ列セラル。尚三十七、八年在英中牛津大学ヨリ レ、三十三年文学博士ヲ受ケ、四十五年帝国学士院会員 テ梵文学担任トナル。一 ナリ、三十二年文科大学教授ニ進ミ言語学ヲ担任シ、 萊府各大学ヲ卒業シテ「ドクトル、フイロソフイ オブ、アーツ」ヲ、越エテ二十七年「マスター、 年英国牛津大学ニ入リ、二十五年卒業シテ「バチエロ 観三氏ノ長男ニ生レ、後神戸氏高楠 トル、オブ、リテラチユーア」ノ学位ヲ受ケラル。 ヲ受ケ、二十八年来仏国在学、三十年帰朝、 アーツ」ヲ受ケラル。二十五年来独国「キール」、 「略伝」 高楠氏 ハ慶応二年五月備後国 時東京外国語学校ヲ兼任セラ 孫三 御 一郎氏 調郡 東大講師 八幡村深井 ノ養嗣子ト オブ、 伯 工] 林 ル

戸部、 年三月以来本会ニ於テ之ヲ援助スルコトトセリ。 調査完了セルハ在京都下記三文庫ニシテ外ニ東寺観智院 本年度末迄ニ同博士ヲ主任トシ外ニ橋本、 事業」本調査 鳥越、 中 ハ高楠博士カ数年来ノ事業ニシテ、 野 逸見、 蓮澤、 塚原ノ九補助員ニ依 大屋、 大正 而シテ ij

金

剛

蔵

71

調

查

市

ナリ。

東寺宝菩提院三密蔵、

此

文庫

書

モ

於テハ 凡三 隻対集」 覚シキ「挿書 元帥 40 属シ皆珍 良興福寺霊仙 シ般若三蔵ノ 本ニ依テ古伝ヲ研究 ル 田 関 ル 称スヘキモ 修寺ノ興然両学匠 密 平 -安朝 表セ 奏状」 三百種、 教小 各派 青蓮院吉水蔵、 ス 豊富 ĵ 方 書ト 面 カヨリ 書籍及古文書ヲ包含スト ル 野廣沢十二 モ 書籍ヲ包含シ今期 (闕本)、 悉曇伝本ニ 如 精 日 |梵語読 -称シ得 7 ノナ 訳場ノ首座トナリ心 リ見テ珍書ト称スヘキモノ 徳川 選ヲ 三蔵 ノ亦多シト ハ 他二 極 ij 時 ノ逸伝史料 本」(無題) 此ノ文庫 明時代支那朝 シ得 流 メ古 代ニ至ル ノ自筆ハ 一於テ凡 シ、 比 殊ニ台密ノ本系タル谷 ノ伝本ニ至リ 雖 相 ル 類ナキモ 承 71 超際仙 其数 凡四 他二其 各期二 調 ハ ノ トシテ最必 伝教弘法両 五. 平安中 如 干 查 鮮ニ 雖、 + 地 最多ク斯 種 丰 人宿 各蔵 例ナ ピアリ、 デハ 於ケル 1 函 21 観経ヲ訳出 平安朝 謂 期 注 実用セラレタ 曜図」 要ナル 聖教 悉 以 大師 カ 特 フへ 目二 中 来各時 醍 ラ 最 ル ル 殊 仏 ク、 此 流 闘寺 伝本ニ 精 末期 モ 値 1 \wedge ノ 教 Iシタ 唐 古 ス。 竈 共二入唐 シ、 確 地 殊 伝 録外蔵 代 梵 部 丰 寿 ナ 位 本ニ ·時代 ij ル奈 於テ 両語 成野ン ...ヲ占 於ケ 密教 類 奇 ル 書 於 大 証

> 二十三巻ハ天 等ヲ蔵シ古来 失ハス、 4 文書ナリ、 ヲ保存ス、 心トシテ其ノ ヲ蔵ス。 カラサル 往復贈答ノ記 至ル青蓮院門 中 三玄証 筆 ノ *)* \ サレ 開封 「梵天火 モ 谷 徳川 <u>۱</u> コヲ許 が注 上人ノ \equiv Ŧ 流 「青蓮王府日記」 明 ノ ノ 恵上人自筆 海 ナ 般仏教及密教ニ於テモ亦有 前 サ 勅封アリ 祖 意スヘキ 羅 栂尾高山寺法皷台、 ナリト 跡 末期ヨリ散 僧 ij, ĺ 供養 後 日 皇慶 持 正 ス 々 寛永版 其 本 筆写ニ係ル華厳 一印行後何人モ手 雖、 図 ノ記 正伝 ラ内 代 モノアリ、 又ハ 徳川. .々門 逸甚シカリ 録 「夢の記」 容 _ 如 「活字一 印 凡 史料維新史料 シテ多 跡ト雖、 写本」 キ殊ニ ハ 信、 悉クー 元禄時代 此 伝 「宋蔵目録」 切経」 文庫 シト 宗ノ書 ラ触 クハ 書、 著 九 門 年 ノ記アル文書凡 眼 数ノ ニョリ 宮 雖 臈 ハ レ 宝 目 ス 鎌倉 サ 全部六千三百 全カ E 籍最 トシテ逸ス 中 重 録 函 ヘキ 文庫 jν 維新 宝 尚 府 玄証 如キ 豊 初期 タル ラサ 其 中 貝葉 詩 タ 富 市 称 要部 全本 梵 ラ中 代二 ĺ ル ス ヲ 中 \wedge ス 極 丰 ル ヲ E

第 口 0 事 業報告書」 になって始め て高 楠 順 次郎

+ 他 自

種

7

ij

有力

ナ

ル美術史

斜

ナ

ij

ているのも今回からとなっている。助員」が九名に増員され、しかも、名字が明らかにされ士の経歴が紹介されている。また、調査に関係する「補

三文庫とし、他に東寺観智院金剛蔵が調査中とする。こ蔵、(二)粟田青蓮院吉水蔵、(三)栂尾高山寺法皷台のこの時に、調査完了したのは、(一)東寺宝菩提院三密

査が進行していると考えられる。 料についての簡単な紹介があることから、相当程度の調触れていない。しかし、それぞれの文庫の特徴と重要資

の三文庫の調査と目録がこの時に完成したかについ

ては

八月八日であることが、末尾附録部分に記載されている。また、第二回になって始めて啓明会の設立が大正七年

^{財圖}啓明會第参回^{拾年度} 事業報告書大正十年度 第三回事業報告書

一、事業

本会ハ大正七年八月ノ創立ニ係リ、研究、調査、著作、

ヲ為スコト等(別記寄附行為第)ヲ目的トス。発明及ヒ発見ヲ助成奨励スルコト、必要ナル講演、

八

出版

(中略)

)継続中ノ補助事業

古社寺所蔵図書ノ調査

五ヶ年間ニ金五千圓ノ補助

「略伝」 (同内容のため省略)

住所省略)

文学博士

高

楠

順

次

郎

司 ル \exists ル 此 1) 文庫ハ従来最豊富ナル宝蔵ノートシテ各方面 事業」 仏 寺 1) ハ 度高楠氏等ノ 一屡調査セラレタレトモ何レモ皆不完全ヲ免レサリシカ 教素描 南 洵ニ欣幸トスル所ナリ。 京都下京東寺外ニ在リ六孫王神社ニ属セシ 北 (前半ほぼ同文のため省略) 朝二 画 至 家 調査 ル梵本筆写二函、 作品 ノ結果 函等アリ。 其 調査中新発見トシテ平安朝 平 全蔵ヲ登録ス 四 安朝末ヨリ鎌倉ニ至 五 東寺金剛蔵、 大通寺廻心蔵 ノ人士ニ依 ルヲ得 旧 此

智証· 於テハ 蔵 シテ殊ニ江 寺ニシテ源頼朝夫人政子、実朝夫人阿仏尼ノ本願建立ニ ニ注意スヘキモノ多シ。 次期 大師将来梵本ヲ謄写シ、 蔵書百三十一 ノ調 州 査ニ 石山寺ト連絡アル寺院ナルヲ以 譲ル。(七) 函全部, (大) ノ調査ヲ結了セリ。 播州高砂十輪寺ニ於テ貝葉 御室仁和寺塔中 右ノ外江州三井寺ニ於テ テ蔵 倉 別 此 書中殊 御経 倉二

が 始めて記載された。 第二 回 の事業報告書の冒頭に啓明会の補助事業の 目 的

梵本ノ取調ヲ為セリ、何レモ有益ナル研究資料ナリトス

梵本 え、 は次期以 査は完了したことが知られる。 文庫の調 さらに、この時期から、これまでの三文庫の \dot{o} 東寺金剛蔵、 、調査を行うなど非常に精力的な活動であった。 降の調査とし、 査が追加され、 大通寺廻心蔵、 さらに、 東寺金剛蔵、 御室仁和寺の \equiv 御室仁和寺塔中倉の三 一井寺と高 仁和寺塔中 御経蔵調査 砂十輪寺で 調 倉 査 K 0 調 加

大正十 年度 第四回 事業報 告書

極 頭

|メ菅丞相ノ孫ニ当レル中

・興ノ祖

師

淳祐内供

(ノ筆写ニ係

モノ最多ク何

レモ珍書トス

法人啓明會第四 1回大 正 事業報告書

進行中 ノ補 助 事

古社寺所 蔵 図 書 調 杳

了。 蓮澤、 ル シ(中略)(六)御室仁和寺塔中倉、 シ外ニ橋本、 「事業」(前半省略)、而シテ本年度末迄ニ同博士ヲ主 略伝」 村、 蔵全部百三十 調査ヲ結了セリ。 (中略) 五ヶ年間ニ金五千圓 九 住所省略 近藤、 塚原、 (省略 江 八 州石山寺、 大屋、 山田等ノ諸氏ニ依リ調査完了セルハ 藤田、 函 大通寺宝蔵、 文学博士 調査ヲ了ル。 別ニ御経蔵蔵書三十五函ノ調査 大山、 長谷部、 経蔵全部 ラ補 木下、 助 戸部、 全蔵百六十余函 楠 同 \Box 但 蔵書百三十一函全部 寺ハ蔵書最モ精 【入田 鳥越、 順 切経ヲ除ク)、 次 或 中 友、 野 郎 、左ノ如 調 逸見、 水 査結 庄 一ヲ終 良

回 までと異なる部分がある。 ひとつは 「継続

第

原、

とが伺える。しかし、

依然として「進行中ノ補助事業_

の部分に記載されている。

概ね当初の目的とした寺院経蔵の調査が完了しているこ また、昨年度では継続中としていた仁和寺御経蔵を含め、 も、「塔頭蔵全部百三十函」の調査が完了しているという。 となって、さらに九名が追加されたことが変わってい 山 たつめに、「事業」 中ノ補助事業」とあった部分が「進行中」となった。 の経蔵調査を実施していたことが突然表明された。 古社寺調査については、この回になって始めて石山寺 木下、口入田、 の冒頭部分の調査補助員が「藤田、 國友、水原、 田村、 近藤、 山田等」 しか る 大 Š

「略伝」(省略

<u>-</u>0

調査完了シ目下成績整理中ナリ。「事業」(前半ほぼ同文のため省略)本年春迄ニ左ノ通リ

(以下、同文のため省略

ついての具体的記述は見られない。り、進行中のままとなっている。「成績」が何を示すかに完了しているものの、「目下成績整理中」という追記があ第五回が補助事業の最終年度であるが、古社寺調査は

と思われるが、それについての記述は見られない。は、大正十二年九月に起きた関東大震災の影響であろう大正十三年度の事業報告書は発刊されていない。これ

(二) 進行中ノ補助事業

法人內明會第五回片 正財團內明會第五回大 正

事業報告書

大正十二年度

第五回事業報告書

、古社寺所蔵図書ノ調査

五ヶ年間ニ金五千圓ノ補助

(住所省略) 文学博士 高 楠 順 次

郎

法人啓明會第六回法 正 事業報告書~

法人啓明會第九回四年 事業報告書財團啓明會第九回昭和 事業報告書

— 63 —

担当者

高楠順

次郎

分があり、 整理中ノモノ、及一部完成シテ発表済ノモノ」という部 年度末迄ニ全部完成シテ目下印刷中ノモノ、略完成シテ 助事業成績一覧」という一覧形式の中に、「二、大正十三 事業」については変化がないが、末尾 次のように纏められている。年度によりやや 「附表」 に 有補

件名 古社寺所蔵図 書ノ 調査

して掲載する。

表記が異なるが内容は同

のため、

第六回のものを省略

摘要 前年度末迄ノ分 近畿所在拾余名刹ノ拾数ヶ書庫

本年度中ノ分 目下成績整理中 全部ニ付其蔵書ノ詳査了ル

昭和三年度 第十回事業報告書

法人啓明會第拾回昭 和 事業報告書

先年停年ヲ以テ東大教授ヲ勇退セラレ、 略歴」 末尾に以下の 一文が追加され 現二同大名誉教

授タリ。

については、 第五回と同文。

昭和五年度 第十回事業報告書~第十三回事業報告書

法人啓明會第拾貳回照 和財團的 事業報告書

法人咨明會第拾参回昭 和 事業報告書

完成セル補助事業

中略

四二、

古社寺所蔵図書ノ調

査

ノ 補

五ヶ年間ニ金五千圓 助

住所省略) 文学博士 高 楠 順 次 郎

逸見、 水原 主任トシ外ニ橋本、 月以来本会ニ於テ援助スルコトトセリ。 「事業」本調査 蓮澤、 村 近藤、 塚原、 ハ高楠博士多年ノ事業ニシテ、大正 藤田、 大屋、 Ш 田等ノ諸氏ニ依リ、 大山、 長谷部、 木下、 戸 部、 而シテ同博士ヲ 口入田 大正十二年春 馬越、 八年三 中野 或 友

録」二十二巻 寺深密蔵目録」十四 ク完成結了シタリ。 迄ニ調査完了シ、成績整理中ノ處昭和五年十二月左ノ如 御室「仁和寺御経蔵目録」十一巻(三) (五)「東寺金剛蔵目録」四十七巻以上何レ 巻 (一) 粟田青蓮院 四 栂尾高山寺 「吉水蔵目録」 「法皷臺聖教目 江州 「石山

モ貴重ナル資料ナリ。

間にわたって「成績整理中」となり、ようやくこの時に Ŧī. 度までにはすべて完了していたのであるが、その後長期 は完了しているが、 東寺宝菩提院、 箇所の経蔵目録が完成した。しかし、これ以外にも、 古社寺調査に関しては、右に記載した通り、 仁和寺塔中倉や大通寺廻心蔵なども調査 目録完成の報告は記載されていない 大正十二

昭和七年度 第十四回事業報告書

ままとなっている。

法人啓明會第拾四回七年度 和 事業報告書

完成セル 補助 業

古社寺所蔵図書ノ調 査

補 郎

助

金五千

住所省略) 文学博士 高 楠 順 圓 次

「石山寺深密蔵目録」十四巻 東寺金剛蔵目録」 四十七巻ノ書写。 「法皷台聖教目録」二十二巻 成績ハ「吉水蔵目録」三巻「仁和寺御経蔵目録」十

補助決定ハ大正八年三月、事業完成ハ昭和

五年十二月。

卷

ている。 全くの同文(高楠順次郎博士の住所が異なるのみ)となっ 入った「第貳拾回 この 「第拾四回事業報告書」 (昭和十三年度)事業報告書」までは 以降、 少なくとも管見に

報告書から知られる活動内容を整理していく。 順次郎の古社寺調査について示してきた。これらの 以上、 啓明会事業報告書から知ることのできる、

助を受ける以前から古社寺調査を行ってい れていたのか、 高楠順次郎博士は、 正確にはその調査がいつからどのような規模で行 その目的や規模については明らかで 大正八年に啓明会から正式に補 た ただ

6

仁和寺塔中倉

(百三十一函

2 対象となった古社寺と図書の分量は、 以下の通りで

ない。

- 1 青蓮院吉水蔵 東寺宝菩提院 一密蔵
- 3 高山寺法皷臺

2

- 4 東寺金剛蔵
- 5 大通寺廻心蔵 (百六十余函
- 7 同 御経蔵 (三十五函
- 8 三井寺 (梵本調査
- 10 9 石山寺経蔵 十輪寺 (貝葉梵本調査 (一切経ヲ除ク、塔頭蔵全部百三十函
- 3 次の五箇所であり、 昭和五年度事業報告書に、蔵書目録が完成したのは 仁和寺塔中倉の蔵書目録については 東寺宝菩提院三密蔵、 (調査自体は 大通寺廻心
- 完了している) 不明である
- 御室「仁和寺御経蔵目録」十一巻

青蓮院吉水蔵「吉水蔵目録」三巻

- =江州「石山寺深密蔵目録」十四
- 四 栂尾高山寺「法皷臺聖教目録」二十二巻
- 〔五〕「東寺金剛蔵目録」四十七巻
- 4 完成した蔵書目録の寄贈先などは触れてい

調査の補佐員として、当初五名としていたが、すぐ

(5)

に九名 となったようである。 (補助員) に増員され、 最終的には十八名以上

五 高楠順次郎博士の高山寺経蔵調査

ば、 目録についてはほとんど知られないままであった。 い。そして、肝心の完成した五箇所の寺院における蔵書 かも、それぞれの蔵書目録を整備するという点で画期的 寺の図書調査は極めて大規模、 利用されていたかについては依然として不明な点が多 なものであった。しかしながら、その成果として、例え ここまで見てきたように、高楠順次郎博士による古社 ほぼ同時期に進行していたとされる『大正新脩大蔵 の校合資料として、どの寺院のどの資料がどの程度 かつ組織的なもので、

寺 の経蔵 かし、 (収蔵 近年、 庫 筆者が調査に従事している、 から、 高楠順次郎博士が作製した蔵 栂尾高山

書目録「法皷臺聖教目録」二十一 冊の存在を確認するこ

介している。 とができた。この点については、 すでに拙稿で概要を紹

この論考と、筆者が再度高山寺収蔵庫の原本調 査した

調査が実施された年代順に整理し直し、

結果をもとに、

H さらに担当者の氏名も一覧して示す。 台聖教目録」に記載された、 は、 調査担当者、 調査開始なのか終了時なのかは不明であるが、 担当箇所 (冊)とする。記載した年月 調査の年月日順に並べ、以 掲載順は、「法皷 初

> 第二十一 **#** 大正八、 法皷臺聖教目 九 録終 十六 高楠 順次郎、中埜義照

廿二

(内題) 法皷臺聖教目 録 廿二 止 石水院別置

大正九年

大正九、 弋 廿六 高

楠順次郎

法皷臺聖教 \blacksquare 録

(第二冊) 大正九年七月廿六日 戸

部

隆吉

法皷臺聖教目 録二

第三 **m** 大正九、 法皷臺聖教目録三 弋 廿六

逸見梅栄

第四 . ₩ 大正九年七月廿六日

塚

原

順

英

法皷臺聖教目録四

第九冊 大正九年七月三十 Н 塚 原

順

英

大正八年

第五冊)

大正八年八月一日始之

大屋徳城

第六冊

大正八年八月 法皷臺聖教目録六

H Ŧī.

戸

部隆吉

法皷臺聖教

目録

としておく。

0

第五冊

13

「始之」とあることから、

調査開始時

法皷臺聖教目録九

第十冊

大正九、

弋

 \equiv

蓮澤浄淳

法皷臺聖教目録十

第十二冊) 大正九年八月 \exists

戸

部

隆

四

第十七冊)

大正九年八月七日

戸

部

隆吉

第十三冊 大正九年 法皷臺聖教目録 八月 兀 十二 日

法皷臺聖教目録 十三 戸 部

法皷臺聖教目録

应 冊

第十五冊)

大正九年八月四

 \mathbb{H}

塚原

順

英

大正九、 兀 十四四 蓮澤

浄

淳

第十六冊) 大正九、八、 法皷臺聖教目録 十五

蓮澤浄淳

名が見えることや、

担当したであろう目録の連続性から 回啓明会事業報告書の記載に右の三

これら三冊は、

第二

見て、大正八年調査時のものとみて良い

結局、高楠順次郎博士グループの高山寺経蔵調査は

法皷臺聖教目録十六

法皷臺聖教目録十七

第十八冊)

大正九、

八、八

蓮澤浄

法皷臺聖教目録十八

当者は大屋徳城は大正八年のみである(欠けている二十

冊を担当した可能性も残る)が、戸部隆吉、逸見梅栄

夏期に一応の完成をみたものと考えられるのである。 大正八年八月から開始し、翌大正九年八月十五日以降

抇 \mathcal{O}

大正九年八月九日

塚原

順

英

第十九冊

法皷臺聖教目 録 十九

法皷臺聖教目録二十

第二十冊)

大正九、

八、

十五.

高

楠

順

次郎

内題 法皷臺聖教目録 廿

録

は「二十一」となるはずの一

冊を欠いており、

その

現在、

は考えられないほどの驚異的なスピードであると言える。 合計八名でこの聖教目録を完成させている。これは、現在で 塚原順英、蓮澤浄淳、長谷部隆諦、橋本進吉の署名があり、

高山寺に残る高楠順次郎博士の「法皷臺聖教目

以上の他に、 年月日の記載がない三冊がある。

第七 第八冊 冊

橋本進吉

長谷部隆諦

法皷臺聖教目録十 法皷臺聖教目 録 八

第十一冊

逸見梅栄

法皷臺聖教目

録

<u>五</u>

を照合していけば内容はおおよそ推定できると考えられと箱番号、典籍の配列などは一致しているので、それら在の収蔵状況を基に作成された「高山寺典籍文書目録」作成年月日と担当者を知ることが出来ない。ただし、現

る。

後考を期したい

六 高山寺における調査の実態

跡のある画像を紹介する。高楠順次郎博士が啓明会からの補助を受けて調査した痕高楠順次郎博士が啓明会からの補助を受けて調査した痕最後に、現在の高山寺に所蔵する聖教箱の側面に残る、

破損したり、 か 類が収納されてい 現 取り出された第一 13 在、 ては、 5 高 新たに発見された典籍文書類や、 江戸時代にかけて作成されたものがあった。 山寺経蔵の聖教箱は、 二二○箱以上の聖教箱があり、 昭 《和四十四年以降に新造した。この新造の経箱 使用に耐えられないと判断されたものにつ る。 部から第三部のほ 経箱としては、 重要文化財指定のためなどで かに、 もともと鎌倉時代 それまでの経箱が その中に典籍文書 第四 部として さら

> 平安・ れ_{(注9} には、 た折」のものであるとい 承によると、大正の末頃に、 ものを収納したという。 土蔵 鎌倉時代の典籍文書が (旧経蔵) 内の大型の唐櫃に収蔵され . ئ 高楠順次郎 「反故 これら「未整理品は、 0) 類として一括 博士が調査され てい 伝 た

(一 六

は、 側 な役割を果たす」と指摘している。さらに、 考え、」ひいては「経蔵の歴史的変遷を解明する上で重要 0 には、様々な墨書や貼り紙がある。 大総合図書館ともいうべき高山寺経蔵の形成と伝流 (にあるすべての墨書を調査された。 経箱に記された墨書 このような高山寺経蔵の近 経箱の側面だけではなく、 0 識語に着目 世以前 裏側や被せ蓋の上部や内 奥田勲氏はすでにこ に作製され Ļ 「中世における 石塚晴通氏 た聖教箱

に多くの貼り紙があり、右側から現在の経箱には、画像1に見られるように、墨書以外

「第六七」

「昭和四十四年四

月

整理了

た文化財保護委員会による調査によるものと考えられ、の貼り紙がある。ひとつめは、昭和二十九年に実施され



画像 1 高山寺経蔵第六七函側面

博士グループの二回目の調査と一致しており、 方を総合的に検討していくことで、近代における聖教調 はその際に調査を実施した痕跡と見られる貼り紙が残さ 高山寺経蔵には、 その隣は、 に記載された日付などの情報が残っているわけではな 糸口になると考えられる。 近現代の典籍文書類の保管と整理状況を解明する大きな 査の実態と、特に、高山寺においては従来不明であった、 れているのである。これら経箱に残る貼り紙と墨書の の目印として担当者が貼付したものであろう。 した中心部に、「六七」という箱番号、下部に「大正 書綜合調査団による悉皆調査の際のものである。 「八葉蓮弁」という、 ただし、すべての経箱に「八葉蓮弁」 の青焼き版が現存 二」の墨書が見える。この日付はまさに高楠順次郎 数は多くないが他にも貼り紙があり、 昭和四十四年以降に実施された高山寺典籍文 高楠順次郎博士による「法皷臺聖教目 和紙に朱色で印刷 (一冊欠) するばかりか、 の貼り紙とそこ (あるいは押 六七箱には、 調査完了 つまり ところ 経箱に 印 九

画像2のように、

貼り紙の痕跡のみが残っているも



画像 2 高山寺経蔵第一二三函側面

以上、

高楠順次郎博士による大正年間に行われた、

古

例と言える。 がれてしまっている経箱も多い。画像2はその典型弁」の貼り紙があったであろうと推定出来るものの、殆う墨書がないものもある。あるいは、おそらく「八葉蓮のの、肝心の八葉蓮弁やそこに書き込まれていたであろ

<u>一</u>八

おわりに

社寺図書の調査の概要を、主に啓明会事業報告書から整理してみた。さらに、この古社寺図書の調査の実態を知理してみた。さらに、この古社寺図書の調査の実態を知達者を始めとする科学研究費の助成を受けたメンバーによる高山寺収蔵庫の調査の過程で、高楠順次郎博士の一よる高山寺収蔵庫の調査の過程で、高楠順次郎博士の一よる高山寺収蔵庫の調査のほかに、『大正新脩大蔵経』の編纂事業と深く関係すると思われる資料も見つかっている纂事業と深く関係すると思われる資料も見つかっている

ていく予定である。

課題としたい。 聖教箱全点についての、このような観点からの詳 皷臺聖教目録」との対応の解明などについては、今後の と、青焼きとして現存している高楠順次郎博士による「法 査には至っていない。経箱にある貼り紙や墨書の全体像 いことを改めて知ることとなった。また、高山寺経蔵の 本稿の取り扱う事項はあまりにも幅広く、かつ奥が深 細 温な調

注

〔1〕鷹谷俊之『高楠順次郎先生伝』二十三年四月号、大空社 九九三年、 67 頁

 $\widehat{2}$ 鷹谷俊之「大正新脩大蔵経と高楠博士」、大法輪四月号、

九五六年、32頁

3 注1文献、44頁

4) 注1文献、44頁

5 6) この部分における「啓明会」に関する記述の大部分は とがきに代へて―」『高山寺経蔵典籍文書目録完結篇』、高 · 寺典籍文書綜合調查団、 築島裕「高山寺経蔵典籍文書総合調査団の歩み 汲古書院、二〇一九年、558頁 あ

> 抜けた一族。日本初の学術財団「啓明会」と赤星家(上編)、 与那原恵「蓄財よりも趣味に生きる 以下の論考に依拠し、適宜引用しつつ概要をまとめている。 昭和史を豪快に駆け

東京人、都市出版、二〇一三年

(7)徳永良次「高楠順次郎博士作成の『法皷台聖教目録』 二〇二三年 介」、令和四年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集、

(8) 石塚晴通「高山寺経蔵現存経箱識語」『高山寺経蔵典籍 文書目録完結篇』、高山寺典籍文書綜合調査団、 汲古書院

二〇一九年、288頁

(9)注5文献、558頁

(10) 注5文献、558頁

11) 奥田勲「高山寺典籍の集積と伝来(一) ての考察―」、宇都宮大学教育学部紀要第1部、 ―経函につい

九八一年、34頁

(12) 注8文献、283頁

(13) 月本雅幸氏(東京大学名誉教授)ご教示による 高楠順次郎博士、小野玄妙らの名前が見える記録が近

年になって見出された。

<u>一</u>九

題番号23k00558)による成果の一部である。

付記

本稿をなすにあたって、画像の使用を許可いただきました高山寺御当局、田村執事長に感謝いたします。 また、高楠順次郎博士に関しては、「八葉蓮弁」の貼りまた、月本雅幸先生に御礼申し上げます。 した、月本雅幸先生に御礼申し上げます。 した、月本雅幸先生に御礼申し上げます。